

日本の生態人類学とアフリカ熱帯雨林

坂梨 健太 (SAKANASHI Kenta) *

生態人類学とは自然と人間の関係を考える学問である。とりわけ、アフリカを対象とした日本人による生態人類学研究は、霊長類学研究と密接に関わり、人類進化の解明を大きなテーマとして掲げた。1950 年後半、タンザニアとウガンダの国境付近で、今西錦司 (Imanishi Kinji)、伊谷純一郎 (Itani Jyunichiro) によって開始されたゴリラ調査が、日本人のアフリカ学術調査の発端である。その後、霊長類と比較しながら、人間が様々な自然環境のなかでどのように適応して生きているのかという問いのもと、牧畜民、狩猟採集民、農耕民の研究が展開されていった。これらの研究の特徴の一つは、長期にわたる現地調査である。

サバンナや砂漠地帯の研究に遅れて、アフリカ熱帯雨林における研究は、内戦中であったザイル (現コンゴ民主共和国) の政情が安定した 1970 年以降に開始された。熱帯雨林に暮らす狩猟採集民や農耕民を対象にして、かれらが森林環境の中でどのように食料を得ているのか、かれらの活動がどのように森林に影響を与えているのか、といった研究が積極的におこなわれていった。たとえば、熱帯雨林のなかで狩猟採集活動だけで人間が生きているかどうかという問い、つまり、野生ヤムに炭水化物を依存できるかどうかというワイルドヤム・クエスチョンに対して、安岡宏和 (Yasuoka Hirokazu) は、数ヶ月にわたる森林内での狩猟キャンプの調査から狩猟採集のみで生存に必要なカロリーを得ることができることを明らかにした (Yasuoka 2006)。

近年では森林破壊が世界中で問題にされており、アフリカ熱帯雨林も森林保全の点で注目を浴びている。森林破壊の原因は、焼畑などの現地住民による過度な土地利用、森林資源の利用であるとしばしば考えられてきた。このような議論に対して、日本人による生態人類学研究は、現地住民の生活が森林資源に大きく依存しているものの、彼らの適度な利用はむしろ森林保全に貢献していることを示してきた。

このように森林保全の議論が高まる中、生態人類学の手法を用いながら、報告者はカメルーン南部を調査地として、そこでおこなわれるカカオ生産の研究を続けてきた。カメルーン南部のカカオ生産は、大木が残された小規模な畑でおこなわれてきたため、森林保全と換金作物生産を両立させるアグロフォレストリーとして評価される。人口密度の低いカメルーン南部において、カカオ生産を維持するために、カカオ農民は近隣に暮らす狩猟採集民の労働力を確保する必要がある。カカオ収穫期間中、カカオ農民はまとまった現金をもっていないので、森林環境で得られたヤシ酒や野生獣肉を提供し続ける必要がある。しかし、人々の森林内での活動は、国際機関の影響を受けながら、国家が定めた法律によって一定の区画に押し込まれている (Sakanashi 2011)。

このような一方的な押しつけに対して、近年、「歴史生態学」の議論が注目されている。歴史生態学とは、「人間と自然の相互作用の歴史、すなわち人間—自然関係の歴史的变化と展開に関する探求であり、具体的には自然のなかに刻印された人為と文化の跡を読むこと

* 同志社大学グローバル・スタディーズ研究科・日本学術振興会特別研究員。

である」と定義されている（市川 2003: 54）。人びとの過去の移動や居住地を森林の中にたどって明らかにし、慣習的利用として位置付けることは、一方的に人びとの活動を制限する動きに対抗する手段となりうる。しかし、慣習的な利用空間だけでは現地住民の暮らしを森の中に留めてしまうことにもなりかねない。彼らは森林内にとどまらず、しばしば町に出稼ぎに行ったり、子供は都市で教育を受けたりする。森林の慣習的な利用とそれを越えた活動の両方を視野に入れることで、熱帯雨林に暮らす人々の活動全体に光を当て、森林保全に関する政策やプロジェクトの一方的な押しつけやそれに対する反論がどのような前提に基づいて現地の人々の生活を捉えてきたか、批判的に検討できるのではないだろうか。現地に赴き、定点観測をおこなう調査方法は、今尚、重要であると考ええる。

引用文献

- 市川光雄 2003「環境問題に対する3つの生態学」『地球環境問題の人類学 自然資源へのヒューマンインパクト』（池谷和信編）pp. 44-64 世界思想社.
- Sakanashi, K 2011 "Land Use Patterns for Cacao Agroforestry in Southern Cameroon", *African Study Monographs* 32(4): 135-155.
- Yasuoka, H. 2006. Long-term Foraging expeditions (molongo) among the Baka hunter-gathers in the Northwestern Congo Basin, with Special Reference to the "Wild Yam Question". *Human Ecology* 34(2): 275-296.